



「平安の気象予報士 紫式部  
一源氏物語に隠された  
天気科学」

石井和子著 講談社+α 新書、  
2002年11月、222ページ、800円  
(本体価格)

いずれのおほん時にか女御更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに…で始まる「源氏物語」は、日本人なら誰ひとり知らぬ者はあるまい。今ここに千年の時空を超えて、古都の恋物語と現代気象学の邂逅を流麗な筆に託した一冊が上梓された。暫しは世俗を離れて雅の世界に遊びつつ、この本の解題をさせていただきます。

そもそも、一見別世界に見える異分野を繋ぎ合わせてそこに新しい視点を見出そうとする試みこそ、ギリシャ・ローマ時代から連綿と続く文化的営為の源流であった。近いところでは、ホメロスの叙事詩オデュッセイを現代に蘇らせたジェイムス・ジョイス、アフリカ原住民の宗教儀式意匠をキュビズム絵画に転化せしめたパブロ・ピカソ、文学と視覚芸術との間の平行現象を論じたマリオ・プラーツの仕事など、まさに人類文化の香りに満ち満ちた営みというべきであろう。

いや、これほど大仰ではなくとも、わが気象の世界にも同類と呼べるような先達は少なくない。さしずめ寅彦や宇吉郎などはその好例であろうし、「文芸気象学」という新分野を開拓した高橋和夫氏の「日本文学と気象」(1978, 中公新書)のような好著もあった。このような発想や視点は、毎日のテレビ気象番組で予報士が四季折々の天気変化を歳時記ふうに解説することにまで深く浸透し定着している。

さてここに紹介する新著の作者石井和子さんも「お天気キャスター」で「気象予報士会会長」の肩書きを持つ気象解説のプロであるが、もうひとつの顔は、学習院大学でフランス文学を専攻の後、TBSのアナウンサーとして活躍された才媛でもある。お仕事から言葉を大切にされる著者にふさわしく、ですます調の柔らかな文体は鴨川の流れの如く淀みなく実に心地良い。なによりも、主題に絡ませて次々と出てくる古来の気象ことば…風花、霞、朧、五月雨、野分、時雨、村雨など…が「声に出して読みたい日本語」さながらに、えもいわれぬ趣きを誘う。

導入部は、源氏物語を生んだ背景としての、平安時代の気候と京都固有の天気への解説に始まる。このあた

りはしっかりとされたデータに裏付けられた「古気候学入門」の趣さえ感じられる正確な記述である。これを伏線として、以下の章では平安の人々が二十四節気など大陸渡来の暦を如何に京都の風土に当てはめて我が国固有の季節感を作り上げてきたかが源氏物語名場面の数々を巧みに引きつつ語られている。そこでは季節区分を単に春夏秋冬とはせず、春から夏へ、夏から秋へ、の章立てで「時の移ろふ気配」を繊細に捉えているあたりに著者の豊かな感性が伺える。たとえば「月夜に雪」の情景の解釈や、「雨夜の品定め」の翌朝が梅雨明けだった、というような新鮮な発見もある。

第7章は一転して「恋愛と天気」と題し、女性ならではの見方で平安貴族の生きかたの機微を語っている。このあたりは、著者の石井さん自身が、ある時は十二単衣を纏った美しい姫君に、またある時はシャネルスーツで装った颯爽たるキャリアウーマンにと、自在に変身して筆を進めておられるような楽しさである。

そしていよいよ終章では、本書の主題である紫式部の気象観察力の確かさを、「須磨」の嵐や「野分」の台風などを例にとって類似の天気図を示しながら現代総観気象学の知見をもとに検証している。各帖に出てくる様々な気象の記述が、実際に式部自身が見た現象を時間経過に忠実に書いたものであることは、すでに国文学の通説であるが、それらの気象の生かし方が舞台背景や小道具の域を超えて、登場人物の心理描写や更には物語の筋立てそのものと密接に繋がっていることを具体例に則して論じているところは説得力があり、著者の新説・卓見と言っても褒めすぎではなからう。

この上に強いて欲張った願いを加えるならば、著作権使用の問題はあったにせよ、「源氏物語絵巻」の一部分でも口絵にカラーで載せてあれば読者を平安朝の雅の世界に誘う良い手助けになったであろうに、と惜しまれる。また逆に、古語の説明はときには必要としても、何箇所かに現れる「現代語訳」は、日本人なら日本語は読めるのだから、無くもがなと思われる。

とまれ、我が国の誇る文化遺産である源氏物語を現代の石井さんが気象専門家の新しい眼で読み解いてくれたことに敬意を表しよう。古典文学は得意でないと言われる方にも興味深く読んでいただけること請け合いである。ましてや、気象学会員ならばなおのこと、一読して忽ち本書の(そして著者の)ファンになるであろうこと間違いがない。

(廣田 勇)